

k-203

# 荒谷館東郭 発掘調査報告書

1991

山辺町教育委員会

## 序

本報告書は山辺町大字大蔵・荒谷地区に所在し、「館の山」と呼ばれる荒谷館の調査成果をまとめたものです。

山辺町の山間部には畠谷城を始め幾つかの山城があります。それらはどれも見晴らしの良い山頂中心に立地しているので、四周の景観の美しさに心を吸い込まれるようで、時の経過を忘れてしまうほどです。しかし、それぞれの築城の時代や歴史的歩みについては知られていない部分が非常に多い。いつ、誰が、どのような背景の下に築き、どんな役割を担ってきたのかについての興味が尽きません。それに、地形を巧みに活用し、それぞれに合った繩張りをしており、地域を守るために工夫をこらした先人の努力に対して心から敬意を表する次第です。

荒谷館については、寛政の三奇人一人、高山彦九郎が東北地方を旅行したときの日誌「北行日記」に「……官方の岸美作が館山も見ゆ」と記されていますが、古くから知られた山城であったのでしょう。また、山辺の人々にとって心の憩いの地でもある玉虫沼一帯は宮宿・岸美作守の領有下にあったので、武田信安公が自分の支配する宮宿・馬吉良村と交換して水源林として確保しつつ玉虫沼築堤に着手した話はよく知られています。したがって、寒河江大江家配下の宮宿岸家の支城としての役割を持った荒谷館は、山形最上家にとっても重要な地点として意識されていたものと思われます。

さて、ここに玉虫沼ゴルフ場造成工事の計画が具体化したので、その域内に入る荒谷館の緊急調査を実施しました。短期間ではありましたが、猛暑の下で行われた調査の結果が本書の内容として詳述されています。東館と西館の二つから成る荒谷館を歩くと、今更ながら当方の先人に対する尊敬の念が湧き、その業績を長く伝えることができれば幸甚と思います。この調査が近年実施されている中世城館祉の調査研究に少しでも役立つことを願っています。

最後になりましたが、責任者として指導に当たられました川崎利夫先生を始め関係各位並びに調査工事に絶大なご支援を下さった株式会社山形ゴルフクラブ、鹿島建設株式会社のゴルフ場工事関係の方々に厚く感謝申し上げます。

平成3年3月

山辺町教育委員会教育長 蜂谷四郎

## 例　言

1. 本報告書は、山形ゴルフ倶楽部（大洋株式会社）によるゴルフ場造成に係る緊急発掘調査として山辺町、山辺町教育委員会が実施した発掘調査報告書である。
2. 調査期間は、平成2年8月22日より8月26日までの5日間である。
3. 調査にあたっては、山形県教育庁文化課、山辺町郷土史研究会、鶴山形ゴルフクラブ、鹿島建設㈱、地元荒谷地区などの関係各機関、後藤礼三氏（県中世城館址調査員）、伊藤清郎氏（山形大学助教授、山形県城郭研究会会長）、普田慶信氏（山形東高校教諭、山形県城郭研究会事務局長）、村山賢二氏（山形考古学会会員）、佐藤庄一氏（山形県教育庁文化課埋蔵文化財主査）、野尻　侃氏（同 埋蔵文化財係長）らからご協力いただいた。

4. 調査要項は下記の通りである。

○所在 山辺町大字大藪字前田1375の2

○土地所有者 大洋株式会社

○調査主体 山辺町教育委員会

○調査担当 川崎利夫（日本考古学協会会員）

○調査員 川崎利夫

茨木光裕（日本考古学協会会員）

佐藤雄（山形県中世城館址調査員）

工藤一夫（山形考古学会会員）

○調査補助員 久連山進 多田勇 鈴木利明 村山文次郎 村山政光 稲村信市

○事務局 山辺町教育委員会 教育長 蜂谷四郎 教育次長 高橋宏英 社会教育係長 多田裕一 社会教育係主任 峰田順一

5. 本報告書の本文執筆・挿図作成・図版撮影とともに川崎利夫が担当した。

## 目 次

### 序

### 例言

1. 発掘調査にいたるまでの経緯 .....	1
2. 荒谷館の位置とその周辺の遺跡 .....	1
3. 発掘調査の方法 .....	3
4. 調査の結果 .....	5
5. 荒谷館の構造と性格 .....	10
6. 結言 .....	13

## 挿図目次

第1図 荒谷館の位置及び周辺の遺跡 .....	2
第2図 遺跡全体図及び発掘区設定図 .....	4
第3図 A区柱穴配置図 .....	5
第4図 A区柱穴平面及び断面図 .....	7
第5図 B区土層断面図 .....	8
第6図 C区土層断面図 .....	9
第7図 荒谷館縄張図 .....	11

## 図版目次

1. 山辺町東側の水田中より荒谷館附近を望む .....	14
2. 荒谷館全景 .....	14
3. 荒谷館東郭を東側より望む .....	15
4. A発掘区の柱穴 .....	15
5. 柱穴 P.8 .....	16
6. 柱穴 P.3 .....	16
7. B区トレンチ .....	17
8. B区土層断面 .....	17
9. C区トレンチ .....	18
10. A区の発掘状況 .....	18
11. 荒谷館を東南から望む .....	19
12. 東郭から西方大蔵方面を望む .....	19

## 1. 発掘調査にいたるまでの経緯

東村山郡山辺町大蔵より同畠谷にいたるまでの白鷹丘陵中央部は、標高400mから500mの山々が連なり、森の中に大小の湖沼が無数に点在する。このあたりには「県民の森」をはじめ「玉虫沼」など、レジャー施設が置かれ、附近一帯がリゾート開発の対象地として道路や施設が設けられる計画もある。

山辺町の西部、大蔵地区の荒谷集落南の丘陵が山形ゴルフ俱楽部によるゴルフ場として開発されることになった。町としても過疎化対策の一環としてこの開発事業に協力してきた。ところが開発予定地内に、中世の城館跡である「荒谷館」が存在する。

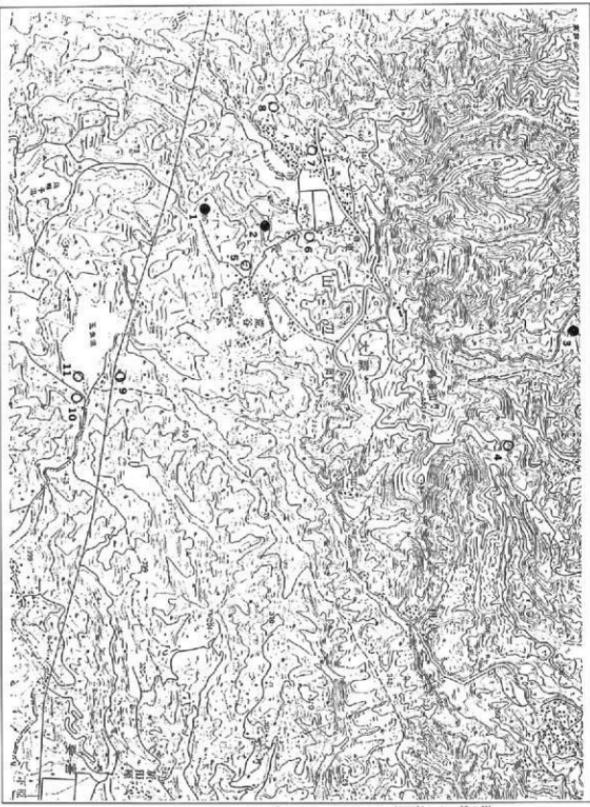
山辺町教育委員会では事業主体である大洋株式会社及び鹿島建設株式会社と協議を重ねた結果、空襲によって囲まれた主郭（西郭）を予定地内からはずし当初予定地の設計変更を行った。しかし副郭と考えられる東郭は予定地内にかかるので、工事が行われる東郭西半分を発掘調査し、遺構の有無を確認するとともに記録保存をはかることになった。「荒谷館」については、県教育委員会によってすすめられている中世城館社調査の一環として、後藤礼三・佐藤雄氏らによって繩張図作成などの現状調査が行われ、5月には菅田慶信氏が町教委の依頼によって事前調査を行っている。

発掘調査は、工事開始直前の8月22日より5日間の予定で、山辺町教育委員会が調査主体となり、川崎利夫を発掘担当者として関係各方面の協力をえて実施したものである。

## 2. 荒谷館の位置と周辺の遺跡（第1図）

荒谷館は東村山郡山辺町大字大蔵字前田に所在する。大蔵地区は白鷹丘陵中にある。白鷹丘陵は標高994mの白鷹山を中心とする起伏にとんだ丘陵で、南北に連なり、置賜地方と山形盆地、西村山地域と山形盆地の間に横たわる。もともと白鷹火山の噴火によるカルデラを形成し、火口底には大沼をはじめとする湖沼群が点在する。そしてところどころに舟底型の小盆地があり、荒谷館の南東に位置する玉虫沼も四周山に囲まれた盆地状の沼で、中世末期に灌がい用水として開発された。

大蔵の集落も、舟底状の小盆地を呈し、西村山郡朝日村宮宿と山辺、さらに置賜方面へ向う交通の要所として発達した。とりわけ近世においては、青苧や紅花などで活躍した豪農の福村家があり、小城郭のように石垣を築いた豪壮な門構えは往時の繁栄をしのばせる。字荒谷の集落は、小盆地の東辺丘陵上にあり、荒谷館はさらに集落の西南750mの位置にある。なだらかで低平な丘陵が連なるあたりに、標高492.3mと487.5mの小丘陵が東西に並んでいる。より高い方が主郭で西郭と呼ぶ。それより5mほど低い峯が東郭で、主郭に連なる



第1図 荒谷館の位置及び周辺の遺跡 (国土地理院  
1/25,000)  
1、荒谷館 2、蟹沢館 3、館の峯  
4、金城 5、荒谷 6、櫻の森  
7、前方A 8、前方B 9、玉虫沼古跡跡  
10、玉虫沼A 11、玉虫沼B

- 2 -

副郭と考えられる。その脇の標高は471mほどであるから西郭は21m、東郭は16mの比高を測ることができる。主郭からは樹木が繁茂しているので眺望はそれほどきかないが、副郭である東郭頂上からは、山形盆地中東部を望むことができる。また眼下には大原の集落や古道を間近に見下す位置にあり、さらに信鷹の山、小鳥海(標高531m)や湯舟の館の峯を遠望することができる。(第1図、第2図)

白鹿丘陵はその地理的位置からして、戦国時代において山形を本拠とする最上氏に対する置賜の伊達・上杉氏、また西村山地における大江氏などの抗争を示すように山城が多く築かれている。荒谷館の南、作谷沢地区の畠谷城は、慶長5年(1600年)9月関が原の合戦の余波を受けて山形城攻略を目指し狐越街道より進攻してきた上杉方の直江山城守の軍勢による激しい攻撃を受けて、城主江口五兵衛をはじめ最上勢は多く討死し落城している。

また荒谷館のすぐ北500mの、大原集落東辺の台地には、二重の濠があったといわれる蟹沢館がある。濠は埋められてしまったが、これは独立の館とするよりは荒谷館の前哨線的防衛施設と思われる。さらに遠く北側には湯舟集落に館の峯館があり、空濠や曲輪をもつ堅固な館である。荒谷館、蟹沢館、館の峯館は南北にほぼ一直線に並ぶが、戦国期における同一館主による同じ系統の館群と考えられる。

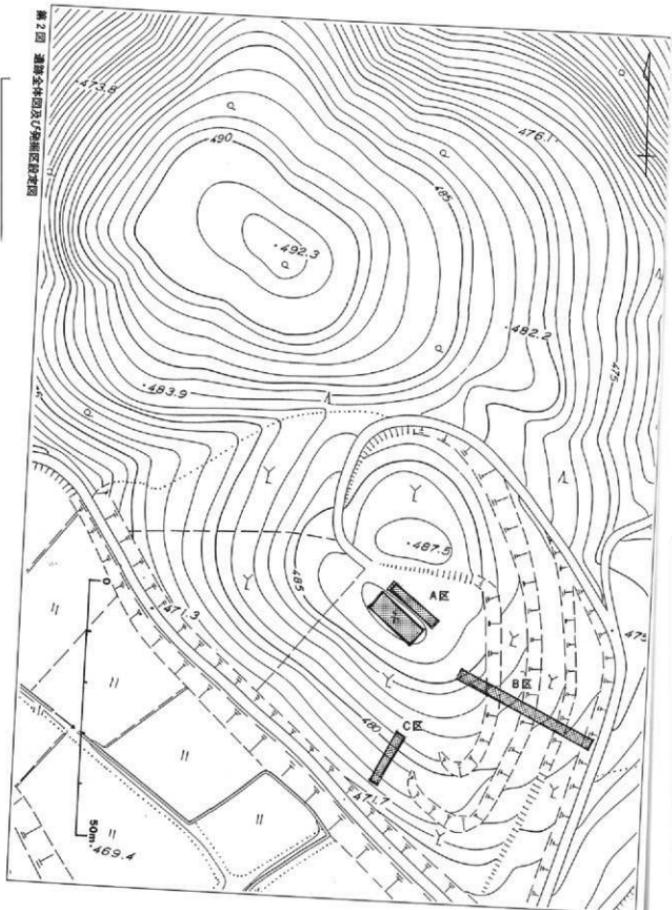
これら館群の他に、金城・荒谷・前方A・前方B・玉虫沼A・玉虫沼Bなどの繩文遺跡が小盆地縁辺部などに散在する。打製石斧や石器などが出土しているが、中期以降の小規模なキャンプサイト的な遺跡が多い。なお、玉虫沼古跡群は、1979年の発掘調査によって竪窓が発見され、糸糸底の須恵器壺などが多数出土している。10世紀前後平安時代の窓跡群とみられる。(1989. 3 山辺町教委「玉虫沼1号窓跡発掘調査報告書」)

### 3. 発掘調査の方法 (第2図)

荒谷館を北側や東側からみると、いくつかの段をもつ方錐台状に見える。(図版2)そしてその背後に西郭が木におおわれて望まれる。建設工事にかかるのは、東郭の頂上部から東半分であるから、次のような目的で発掘区を設定した。

- (1) 頂上部の平坦面に構築部の有無を確認するため発掘区を設定する。
- (2) 東側の傾斜変換線より頂部にむかって段状に連なる帶曲輪を通したトレンチを設定し、その構築の状況を明らかにする。
- (3) 南側の斜面は、急であるため明瞭な曲輪は見られないが、幅は狭いながら小さな段が何段にも取りまくので、人工的なものであるかどうかを確かめる。

以上のような目的で発掘箇所を設定した。(1)をA区、(2)をB区、(3)をC区と呼



ることにした。

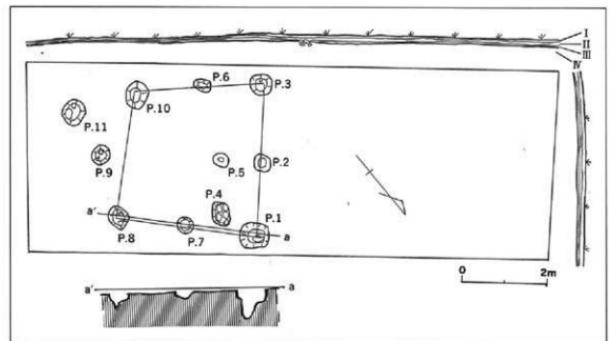
A区は、 $4 \times 11m$ を頂上部のやや高まりのある部分に設け、その右側に $2 \times 12m$ のトレーニチを平行して設定した。B区は $2 \times 28m$ のトレーニチを斜面に直行して設け、C区はやはり斜面上から下に $2 \times 11m$ のトレーニチを設定して発掘を開始した。発掘総面積は $146m^2$ である。

段状の帶曲輪が4段にわたり上から頂上にむかって連続する東側斜面は、最近ブルドーザーによって段々畠に開かれたものだと話があった。このあたりがもともとどのような状況であったかを確かめることもB区におけるトレーニチ設定の理由であり、C区とともにその土層断面の観察に主眼を置いた。

草木の根が張りめぐらされる表土の腐植土層はもとより、B・C区においては基盤層である黄褐色粘質土の上面まで重機を用いて掘さくを行った。この粗掘りは発掘開始の一日目で完了し、その後発掘区内の面整理、土層断面の整理、柱穴の調査などを行い、4・5日目には図面作成・撮影に主力を注ぎ、5日間にわたる調査を完了した。

#### 4. 調査の結果 (第3図～第6図)

調査の結果について以下A・B・C発掘区の順に述べよう。A区の山頂部は、東西40m、南北40mの平坦地で隅丸の三角形状を呈する。北側と南側に長辺円形の50cm程の高まりが



第3図 A区柱穴配置図



第2図 遺跡全図及び発掘区設定図

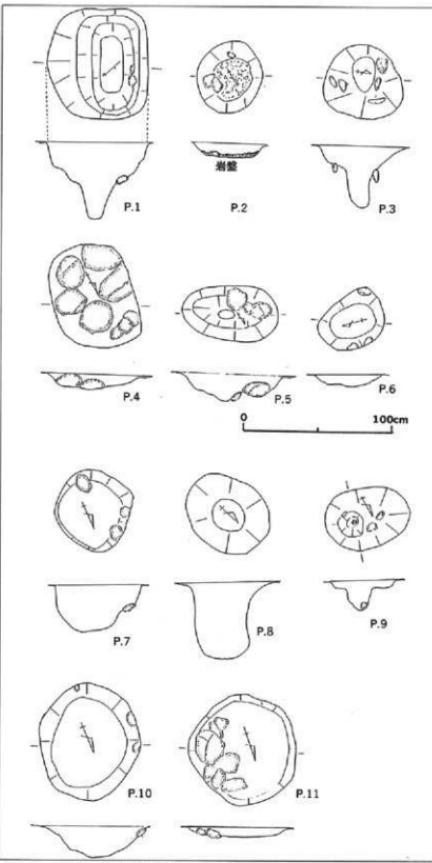
あり、工事にかかる北側のほぼ全部とそれと平行する低い場所の2箇所にトレントを設定した。後者をA'区といふ。A区もA'区も覆土が薄く地表より35cmで、基盤のローム土に達する。A'区には何らの構造も認められなかったが、A区の西側において12個の柱穴らしい落ち込みが認められた。(第3図) そのうち、柱穴調査が進行する中で、P.4とP.5及びP.11は落ち込みが比較的浅く、明確に構築物を埋設した柱穴とは認められなかつた。掘り方が明らかで、その中に柱材などを埋めたことがうかがわれるのは、P.1、P.3、P.8、P.10で、これらが主柱穴であろうと推定される。それら主柱穴の間には、P.1とP.3の間に岩盤をやや掘り込んだP.2、P.1とP.8の間にはP.7、P.8とP.10の間にはP.9、P.3とP.10の間にはP.6があり、主柱穴の間にそれを補強するような支柱があつたことがうかがわれる。(第3図)

主柱穴は、掘り方が60cmより80cmの不整円形をなし、更に中心部に円形の柱痕を埋めた痕跡があり、それは地表より50及至60cmの深さに及んでゐる。おそらく先頭を細く削った10及至15cmの丸太柱の柱を埋め込んだものと思われるが、これらの柱穴はいたって粗放で、柱の動画を防ぐため礫石を周囲に配している。但しP.10のみ深さが10cm程度で浅い、主柱穴の中間にあつた支柱穴も主柱穴より掘り方が小さく、深さも10~20cm程度である。(第4図)

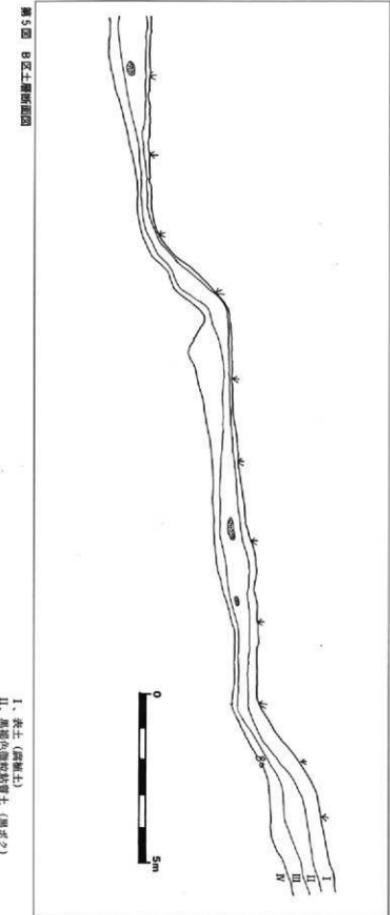
なお、P.1とP.8の主柱穴からは、底部より柱の沈下を防ぐ長さ20cmの朽ちた横木が出土し、P.1からは針金を取り付けたもののが掘り出された。したがつてP.1とP.3は、最近設けられた葡萄棚の支柱であることが判明した。それでも周囲の基盤層は固い岩盤をしてゐるので、もともとあつた柱穴を再利用して、深くやや広く掘つたものと推定した。第4図のP.1とP.8は、もともとの柱穴の状況ではない。(第4図)

主柱穴P.1とP.3の柱間寸法は3、4m、P.3とP.10の間は3m、P.8とP.10の間も3m、P.8とP.1の間は3.3mであるからやや重みをみせるが柱間を10尺にした櫛状の構築物があつたものと思われる。主柱間に支柱を置いた10尺方形で、高さ5m内外の櫛の痕跡と推定されるのである。それは附近にあった樹木を切り出し、組み合せて構築した臨時の施設であったことが柱穴の状況からもうかがわれるのである。東郭頂部の位置からしても櫛があつたことはうなづけるのである。東郭頂部において他の構築物は認められない。(第3図)

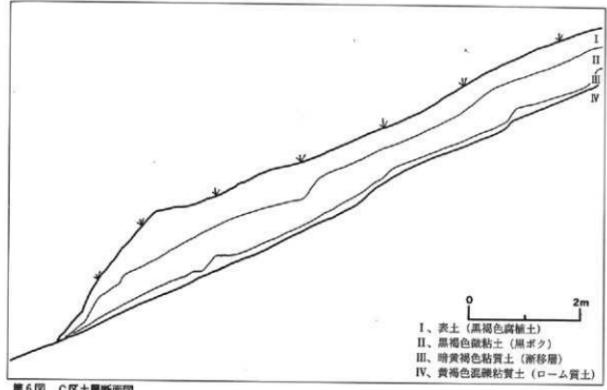
B区を含む東斜面は、幅5m内外の帯曲輪が下から上にむかって4段に構築されて取り巻いている状況を示している。最近において段々畑をつくるために重機を入れて整地されたといわれるが、帯曲輪は館をつくる際に斜面を打ち切って設けられたものであることが、B区トレントの断面観察から明らかである。すなわち、最近重機が入れられ整地されたのであるならば、土層にかなりの乱れがある筈である。また基盤層のローム層上にすでに段



第4図 A区柱穴平面及び断面図



- 8 -



形成がみられることは、館構築当時に基盤層まで掘り込んで帶曲輪が形成されたことを示している。(第5図)

B区においては、表土下に黒褐色微粒土層いわゆる黒ボクが厚く堆積している。おそらく館構築の際の地表は黒ボク中にあり、曲輪をつくるにあたって、基盤のローム状土層まで掘り込まれていたのである。後世に畠を造成するため整地されたにしても、土の動きはせいぜい黒ボク上層までであったと思われる。なおBトレーナーの断面3箇所に施土の痕跡が認められるが、後世の整地がここまで及ばなかったことを表わしている。おそらくこの施土群は隨所に認められ、館が機能していたころの地表面に近く、軍勢の野营地における炊飯などの焚火の跡と推定され、各段の曲輪に見出すことができる。この帶曲輪は、幅5m、次の段との高低差1.5m及至2.2mにわたり、東郭の緩傾斜面である東面より北面に至るまで見事に取り巻いているのである。

南面のC区は、傾斜面が急であるために、東面のような整然とした曲輪は必要としなかつたらしく、東面の曲輪は南面に入ると消える。しかし明確な壁は認められないものの、狭い段が6~7段にわたって上から下までつづいていることが現状ではうかがうことができる。C区の土層断面においても、第2・3層において観察することができる。これは自

然地形ではなく、かなりあいまいながら西郭へ通ずる狭小な段が数段にわたって設けられていたのである。これを明確な壁によって区画された曲輪とはいえない。このような段は、他の城跡にも多く例を見ることができる。(第6図)

以上のように発掘調査の結果から、東郭の頂部に橹を据え、東面に腰曲輪をめぐらし、急斜面の南面にあいまいな数段の段を構築した全容が明らかになったのである。

## 5. 荒谷館の構造と性格

西郭の頂部と東郭櫓跡の距離は77mで、東郭の北々西の位置に西郭がある。西郭が主郭であるのは、東郭より5m余り高く、腰曲輪を防禦施設とする東郭に対して、二重の空濠がめぐらされより堅固に構築されているからである。東西に連なる2つの丘陵が荒谷館で、連郭式山城と從来いわれてきたものである。近世の城郭概念からすれば、西郭が本丸、東郭が二の丸ということになるであろう。

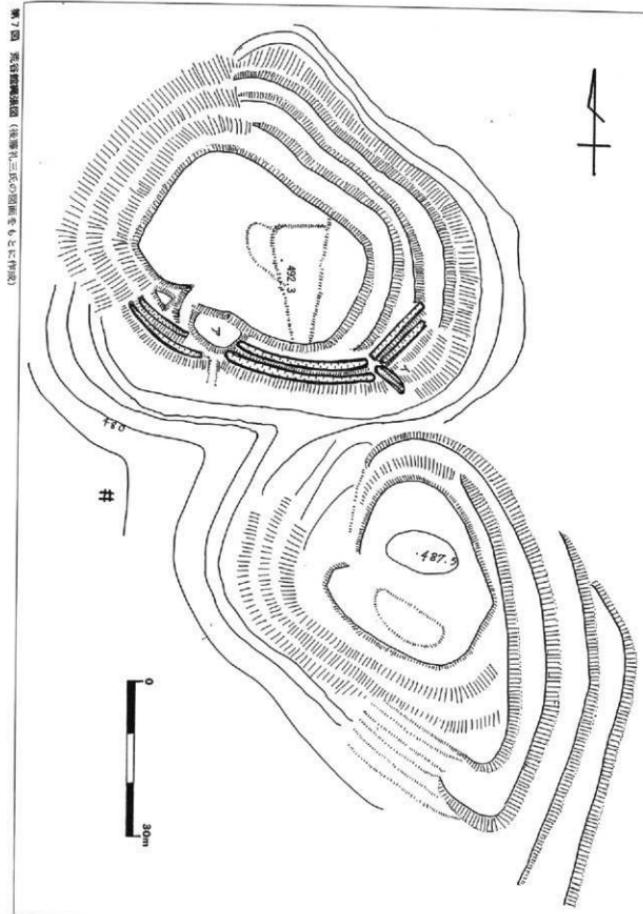
両者に共通するのは、防禦施設である曲輪や空濠が東から南側に向っていることである。これは後に述べるこの城の性格を示すことになる。

ほぼ隅丸方形を呈する西郭の頂部は東郭より若干広く、中心部や東部にやや高まりがあり、何らかの構築物があったことを思わせる。

東郭の裾部は東から西へまわって東郭頂部にいたる路は北にも通じて西郭の斜面に至る。やがて左右に二重の空濠がのび、前面には明確な壁をもつ曲輪が横たわる。おそらくこのあたりが虎口であろう。(ア)右側の二重空濠は間もなく消えるが、左側の空濠は東側から南側へむかって伸びている。一時この二重濠が途絶えるあたりに上から下へ急斜面にそつて堅堀が一条設けられる。(イ)二重の濠が途絶える東から北にかけては、明瞭な腰曲輪が3段にわたってめぐり、西面は急斜面で自然面である。このように急斜面の西面を除く全面が二重濠と3段の腰曲輪によって構成される堅固な構えである。なお南側山麓に自然の涌水を利用した井戸がある。

本郭である西郭につづく東郭はすでに述べた通り、東面から南面にかけて腰曲輪がめぐり、頂上部に橹が設けられている。山頂部からは山形盆地を望見することができ、眼を転すると大藪集落があり、西村山郡朝日町宮宿への道路と北作を経て荒砥と山形を結ぶ狐越街道への道路を俯瞰することができる。現に荒谷館の直下を狐越街道へ通ずる道路も通っている。以上のように、このあたりは宮宿と山形、西置場と山形盆地を結ぶ交通の要衝にあつたのである。

それでは荒谷館は、いつ誰によって構築されたのであろうか。それを示す文献・記録・伝承は一切ない。西村山地域と西置場地域から山形盆地へ入る重要なルートであるこの地



域での戦国期争乱には次のようなものがあった。

- (1) 天正2年(1574) 最上家における義守・義時父子と義光の内紛に乘じて、伊達家が介入した争乱。
  - (2) 天正12年(1584) 山形盆地に霸権を確立しつつあった最上義光が、西村山地域の大江氏を中心とした国人領主たちと干戈を交えた争乱。
  - (3) 慶長5年(1600) 関が原の戦いの余波として米沢に本拠を置く上杉方直江城守が山形城攻略を目ざして畠谷城などで激しい合戦に及んだ戦い。
- (1)は、最上家ののみならず大江氏なども二派に分れて相争っているが、合戦は局地的に行われたのみで、大規模な戦闘行為はなかった。この争乱によって、大蔵に館を築く必要性はなかったとみられる。

(3)は、白鷹丘陵中の村々が戦乱に巻き込まれるが、上杉方は山形城攻略にあたって臨時に構築した陣城は方々に築かれたにしても短期間で荒谷館のような堅固な館は設けなかつた筈である。

山形盆地を見ることができ、軍勢の動きを察知できる位置にある荒谷館は最上氏系の館ではありえず、最上方に対抗する側の防護施設であったものと思われる。この観点からすれば(2)に関連する館とする可能性がもっとも高い。当時現朝日町の五百川地域には、八ツ沼城を本拠とする原美濃守、馬鹿が森城に拠る岸美作守、送橋城の送橋氏ら国人・土豪が寒河江の大江氏を中心として、西村山地域を制圧しようとしていた最上義光に対抗していた。

荒谷館は鳥屋が森城に本拠を置く岸美作守が最上勢の動向をさぐり、その動きを牽制し、且つ街道をおさえるために設けられた最上勢に対する前哨的な陣地であったと考えられる。最上勢による五百川攻めに對抗して街道にそって設けられたのが湯舟の館の峯館でもあった。さらに送橋館が後方の拠点であった。

こうして五百川の諸勢力は最上勢の進攻に備えるが、天正12年6月鳥屋が森城、八ツ沼城は相ついで落城し、大江氏も最上氏の軍門に下ったのであった。従って荒谷館の構築年代は、天正10年(1582)前後と推定されるのである。

#### [参考文献]

- 山形県 「山形県史第1巻」 1982年  
武田泰造 「山辺郷土概史」 1970年  
朝日町教育委員会 「朝日町の歴史」 1988年  
後藤礼三 「中世城館遺跡調査票——荒谷館」 1990年

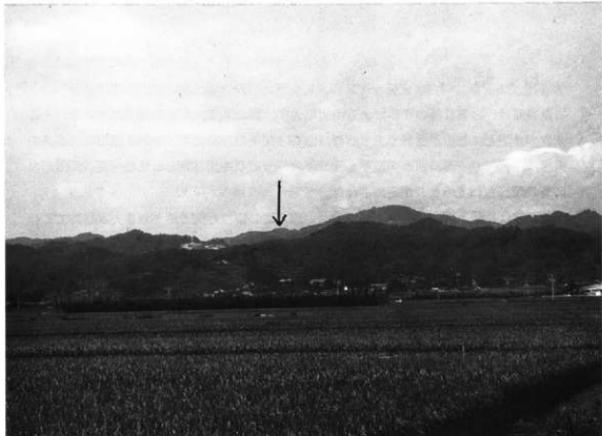
## 6. 結 言

荒谷館は、白鷹丘陵のなかにある山辺町大字大蔵にあり、大蔵の集落の東にそびえる2つの丘陵上にある。主郭である西郭は曲輪と二重の空濠によって取り囲まれ、副郭の東郭は東と南の一部斜面が3及び4段の腰曲輪がめぐることが明らかになった。山頂部には櫓が設けられていたのが認められた。

この館は、最上氏に敵対する勢力の、山形方面の監視と交通路をおさえる目的でこの場所に築かれた。朝日町宮宿の鳥屋が森城を本拠とし、大江氏の勢力下にあった岸美作守に関連をもつ館であり、天正10年前後の構築であると推定したが今後さらに検討の余地がある。

記録保存のための発掘調査をゴルフ場造成工事にかかる東郭において実施し、東郭のほぼ全容を把握したが、主郭が保存されることになったのは幸いである。形を変える東郭の東半分の姿を記録に残し、主郭である西郭を史跡として保存活用をはかるために整備していくことが望ましい。

今後、これと同系と思われる館の峯館や宮宿周辺の五百川系の館跡を比較検討することも課題として残される。



1. 山辺町東側の水田中より荒谷館附近を望む



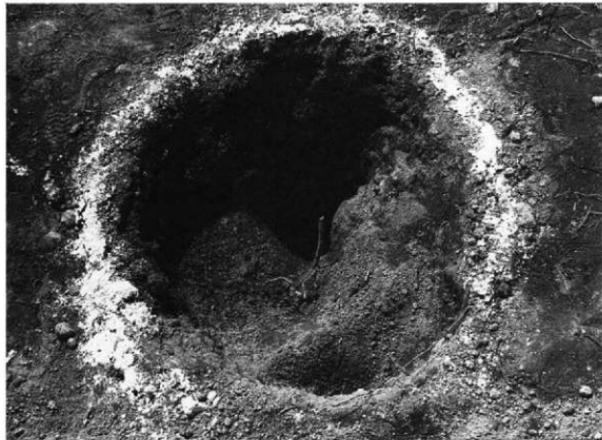
2. 荒谷館全景（背後の林が西界）



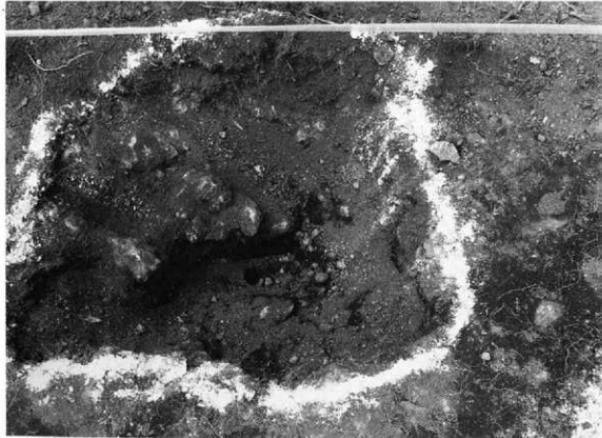
3. 荒谷館東側を東側より望む



4. A発掘区の柱穴



5. 柱穴 P.8



6. 柱穴 P.3



7. B区トレチ



8. B区土層断面



9. C区トレンチ



10. A区の発掘状況



11. 荒谷館を東南から望む



12. 東郭から西方大秦方面を望む

---

山辺町埋蔵文化財調査報告書第3集

荒谷館東郭  
発掘調査報告書

平成3年3月25日 印刷

平成3年3月29日 発行

発行 山形県東村山郡山辺町大字山辺1  
山辺町教育委員会  
印刷 藤庄印刷株式会社

---